岐阜県中学校
国語教育研究会

会報No.１

遺稿　山椒大夫考　……　故河田四郎（２）
中学校国語教育の推進について　……　野田　満（５）
石森先生のお話より
　　国語問題について　……（６）

事務局だより　……（１）
新入会員紹介　……（９）
会計中間報告　……（10）
あとがき　……（11）

１９６２．３．１５

事務局だより

――第一回理事会を開きました――

時　二月十七日
於　梅林中学校

決定したことがら

1会長の件
河田四郎会長が急逝されましたので、会の代表者については、副会長四人の方のご了解の上、会長代理ということで、岐阜市立精華中学校長　野田満先生にお願いしたらどうか。

2研究課題（テーマ）つについて
下部からの盛り上がりを期し、支部または会員各位からお出し願った上、次回の理事会で決めたらどうか。

内容　会員個人の悩みや問題としていることがら。研究その他。
分量　問わない。
形式　原稿を直接事務局に送っていただくか、四ミリ方眼の原紙に、二段縦書きできり、謄写刷り（二一五〇枚）の上、事務局に送付していただく。
袋綴じにして、全会員に配付する。

3機関誌の発行について
1．昭和三十六年度中に、ガリ版刷りでよいから、第一号を作成し、全会員に配付する。
2．昭和三十七年度にはいって、四、五月頃ごろ、第二号を配付する。

4次回理事会の開催について
五月ごろ持ったらどうか。

5時期大会について
次回理事会の時、検討したらどうか。

――事務局よりのお願い――
支部で研究会の予定がありましたら、岐阜市からも、私責でお邪魔しますから、ご通知ください。
――理事長　浅野和夫より――

遺稿

山椒大夫考

河田四郎先生

九月某日、夕暮れから時々驟雨がある。雨晴れの夕空は、ほんのりと明るい。今夜は、鴎外の「山椒大夫」をよむことにした。

殺傷、肉欲、姦通、裏切り――等の背徳を、今の小説は偽悪ぶって描きに描く。擾乱のどぎつさ、悪そのものの賛美という真底、こうしたケースの小説が巾を利かす世の中である。人間の運命を問いつゞける志など忘れてしまったのかと云いたくもなる。「山椒大夫」は、こんな鬱結をほぐしてくれる好個の作品だ。私のせんさくがまた始まる。

鴎外は、知人であった乃木将軍が殉死した事件に大きな衝撃を受けた。封建倫理を人間的に生き抜いた物の美しさを描いた「興津弥五右衛門の遺書」を大正元年に、殉死そのものに対する人間的、心理的な批判を主題とする「阿部一族」が二年に――と、いわゆる歴史小説がつゞく。鴎外の歴史小説を貫くテーマはエゴイズムと言われ、自己を立てるか、自己没却を許すかの何れかである。阿部一族、佐橋甚五郎、大塩平八郎等、男を主人公とする作品は、自己主張の側である。封建社会の固い枠に抵抗してこれを打破ろうとする人間を歴史そのまゝに描こうとすれば、窮屈でもあり、悲劇としか描けない。そこで、歴史そのまゝ――でなく、歴史離れ――をして、自由に想像を働かせたくなっての作が、「安井夫人」であり、「山椒大夫」という。「山椒大夫」が、歴史離れをしているのか、もしそうとすればそれがよかったのか――を考えてみたい。

「山椒大夫」の創作は、鴎外が祖母の幼な物語を思い出したによると言われているが、そうとすれば、中世以来の伝説や説教説話がもとであるとも言えよう。草部典一氏の「さんせう太夫について」の研究では、説教「さんせう太夫」正本やそれの影響である古浄瑠璃について詳しいが、それらの物語構成を、その研究から引用し、鴎外の作と比較してみよう。

さんせう太夫の構成　【説教節　寛永版】

（一）流罪の父の赦免を求めて、安寿、厨子王一行四人の旅立ち、直井の浦で人買いに売られ、親子主従の離散、女中うわたきの自殺。

（二）安寿、厨子王は、由良のさんしよう太夫に買われ、柴刈と塩汲（ママ）みに苦難し、ともに自殺をはかる。伊勢の小萩の親切で思いとゞまる。

（三）姉弟二人の逃亡計画、三郎の立ち聞き、焼鉄をあてられ、監禁される。二郎のはからいで命が助かる。

（四）姉の思慮の結果、厨子王の逃亡が実現し、そのため姉は太夫に殺される。

（五）厨子王は国分寺の和尚にかくまわれ、追手から逃れて上京、梅津院と会い、養子となる。奥州五十四郡の国守及び丹後守となり、丹後に赴き、さんしょう太夫を切る。

（六）厨子王は母の行方をたずね、佐渡で鳥追いになっていた母と再会。

（一）（二）（三）と不幸な辛い事件がつみかさねられ、（四）の姉の犠牲で厨子王の運が開けはじめる。（五）（六）で明るい大団円に終る構になっている。

鴎外の作も、だいたいこの順を追うが、（四）で厨子王を投身せしめていること、（五）で、丹後守として任国に赴いた正道が、山椒大夫を切らないで許し、たゞ人の売買を禁ぜしめたこと――この二点が、説教節の内容と違えてある。

説教節では安寿が厨子王を逃がやつてから太夫のもとにもどる。弟のことを聞かれて、「髪を切られた姉などよりは、里の山人と行く、と申して別れ別れになつたきり」と空とぼけ、心配げに涙を流す。太夫はその涙を弟を逃した嬉し涙と疑い、三郎に拷問させる。縛り、火責め、水責め、果ては三叉錐で膝の甲らをもみ責めにする。正月十六日四つのおわりに、十六才を一期に責め殺されるテンマツが描き出されている。

この部分を、当時の庶民がどのような愛憎と興奮をもって聞いたか想像される。聴手の感動を予想してのつくりごとと言えばそれまでであるが、中世に於いて、貴族や代官たちからいじめ抜かれていた民衆が、武士の勃興に支えられて、それらの桎梏からのがれ出る戦いをはじめる頃の、民衆がナマの目でとらえた場面であったと思われる。言わば、「歴史そのまゝ」の姿であろう。

こゝを鴎外は、「後に同胞が探しに出た、山椒大夫一家の討手が、蛇の坂の下の沼の隣で、小さい藁履を一足拾った。それは安寿の履であった。」と簡潔に表わしている。これは、その前の、「御覧、もう春になるのね」として、朝日のさした岩間に小さいすみれの花を発見するあたりからの、やさしくてしっかりした安寿の描写に照応させることから、自然、歴史離れのしたものになったものか、あるいは、舞姫のエリスを彫刻しあげた鴎外のロマンチズムが、静かなもの悲しさと果てさせたのか。前々からつみ重ねられて来る姉弟のいたましさからすれば、歴史離れが何れに因っていようと、責めあげの場面は、私どもにも頂きたくない。

しかし、（五）で、説教節の、太夫を切るのに対し、鴎外の人買いを禁止したのみで太夫を許し、恩讐二つが高いところでとけ合いした形に、太夫一族繁栄の謳歌となったのは、歴史離れの所論には即しても、どんなものだろうか。

「さんせう太夫」の「さんせう」は、柳田国男氏の研究「山椒大夫考」以来、研究が多くの人に引き継がれ、「散所」と、ほゞ定説化に及んでいる。林屋辰三郎氏の説を借りよう。荘園の一部や、社寺の境内の一部で地子物の免除されていた地域を散所と称したのが始まりで、耕作民の逃亡などにより地子物の運上せられなくなった地域を散所または散田と称するに至る。一定の居所や職業のない浮浪の散民が、相集まって、荘園や寺社の要請に応じ、労働源として、身を散所の耕作雑役に投じて、生活の安定を図る。次第にそれらを宰領とする人大頭的な階級が生じ、領主に従って勢威を張るに及び、長者もしくは太夫と呼ばれるにいたった。これらの長者は、中間にあって、隷下民衆を過酷に使用して、搾取により富裕を究めた。

長者に隷属する民衆は、常に解放を求めて、悲劇をくりかえす。それが漏れて別の散所民にわかると、共感と同情が高まる。長者の没落は、賤民たちの解放の夢でもある。

鴎外には、こうした中世庶民の気持がわからぬ筈がない。また、解釈の新しさとか、キリスト教的な赦されを以ってしても、太夫一族の繁栄を許すことの不自然さを認めない筈はない。にもかゝわらず、あゝしたのはどうしたことか。

西欧的教養を身につけても、その骨髄には封建武士の生活態度や考え方が、日本への郷愁として甦える。しかし、それを突きつめれば、固い枠と、それに対する批判や抵抗で、破滅に赴く運命を描かずにおれぬ。全く窮屈で重苦しい。それで、あの場面を妥協してなるくした｜｜と、こんな上すべりな解釈だけではすまされぬ。

作品を走り読みして、いささか茶畑へ入ったようだ。でも久方ぶりに、鴎外の作品に親しみを甦らせてくれたことを多としたい。

（一九五八、九、一〇　夜）

先日、野田先生から、「河田会長のお書きになったものを、遺稿として載せてはどうか。」という電話をいただき「そうだ。それはいゝことだ。」と思う反面、「何かあればよいが？」と内心、心配しながら、藍川中の高橋先生に連絡しました。ところが、「これはどうだ。あれはどうだ。」と数々の作品を、即座にご返事いただき、とっさにいだいた、あの「ない場合は困るなあ。」という不安を、感じた自分の軽率さが恥ずかしくなりました。いや、それとは反対に、常に自己を磨いて、たゆまぬ精進を続けておられた先生が、ますます大きなものに感じられ、「先生こそは、国語を愛し、真に国語を知る、ほんとうの国語人だった。」と、今さらながら思いを新たにしました。

こゝに掲げたものは、先生の作品中でも、最も短かいもので、発表することは、先生の意にそわないかも知れませんが、“こんなことでも気軽に話し合える会にしたい”という、生前の先生のお気持を、皆さんにお伝えできるならば、先生も地下できっと許してくださることと信じ、遺稿として掲載させていただきます。

（事務局　千種　俊）

中学校国語教育の推進について

――より楽しく、より深く、より正確に――

会長代理　精華中学校長　野田　満

高等学校と小学校との中間にある中学校は、三人兄弟の真ん中の次男坊のようなかっこうである。よほど次男坊自身の力が、その内部に無いと、いじけたものになってしまう。

そういう意味で、中学校国語教師の内部の力がしっかりしていないと、中学校の国語教育の水準を高めることができない。

第一、教科書をひらいてみるとよい。その内容は、かなり深く、広い。

いくつかの参考書を忠実にひもとき、忠実に実践しても、たゞそれだけではなかなか到達できないある深い部分を、いくつかの文章はもっている。

かりそめに授業にのぞめば、いかに練達の教師でも、即座には判別しかねる難解な部分を、ごまかしのきかぬ厳密な部分を、文章は持っている。

文学、芸術、哲学、科学等々のあらゆる分野にまたがり、しかもそれらの現在及び過去にわたる広汎な世界を、文章はその素材として持っている。

言ってみるならば、国語教科書は、「小さい宇宙」そのものである。

われわれ国語教師は、この「小さい宇宙」と取り組み、ごまかしのないきびしい指導を生徒の上に加えているわけであるが、生徒たちは、小学校できたえられた学習方法を駆使して、苦闘する。

けれども、約半数のこどもたちは、まずそのぼう大な量におどろき、あるいは深遠微妙なことばの世界に目がくらみ、ついには取り残され、国語科がきらいになり、わずかに漢字の読みと書き取りだけの、機械的練習の世界ににげこみ、国語学習の命脈を保つといった状態になる。

われわれは、これを放置しておくわけにはいかない。教師と生徒と共に、もっと楽しく、より深く、より正確に、国語教育ないし国語学習を進めていきたい。

昨年半ばすぎから、故河田四郎会長が中心となって、小、中、高、相互の連けいを保ちつゝ、中学校自体の国語教育を、おたがいの力で、地固めしようではないかと

いう気運が高まり、本年一月この会の発足をみた。

郡市によっては、小中一本の組織で研究を進めておられるところもあるので、今は、学校だけの組織を必要とされない向きもあろうと思うけれども、常時活動をめあてとした研究体制ママは、小学校は小学校で、中学校は中学校で、高校は高校でといった直接的な体制ママが必要であるという考えにたつ企画をご理解いたゞき、県下中学校全体の国語教師の方々のご賛成を得たいと思っている。

県一本で、国教教育推進のための大会などを行う時は、小中高が連合して、大いに気勢を上げることも、この道の推進のためにはぜひ必要である。

今秋、高山市で、岐阜県国語教育研究会主催の研究大会が行われることになっている。これには、中学校からも参加して、自分たちの国語教育を、自分たちの手で高めるよう努力しあいたいものと思う

強固に、しかも楽しく団結しよう。

石森先生のお話より

“国語問題について”

石森先生のお話

石森先生が視学委員として、岐阜県に来られ、県下の国語教育の現状を視察されました。たまたま二月二十二日、岐阜市の梅林中学校へも寄られましたので、私たち（当日の参加者八〇余名）は、先生に接する機会を得、興味あるお話を聞くことができました。その時の先生のお話を抜粋し、みなさま方にお送りします。

○生徒の国語力はついている――

本日の研究授業（梅林中の浅野、野田、河村各先生）の様子からして、あれだけ考えを述べ、すなおに話ができるということは、力がついている証拠である。昨日の小学校でも感じたことは、ノートがよくできていた。それは漢字練習がきれいになされているというのではなくて、自分の考え、自分の考えたことを全部書いている。この意味で国語力はついていると思う。

○教育者は子供の成長を楽しみに……

一昨日、岐阜駅に着いたら、夏目という人が出迎えてくれた。夏目氏は現在医大の部長で、日本的なガンの権威であるが、一昨夜はかれと共に語り合った。その時、一冊の小さなノートを見せて、これが先生の書いた批評文ですよと教えてくれた。それは赤いペン字で、「よく解釈してあります」と書かれていて、自分のものらしい。三十年以上も過ぎた今日、ささやかなことばが、夏目氏の胸中にしまわれていたということを思い、先生という職はありがたいものだと感じました。教育者は金儲けはできない。が、教育者が、他の職業と違うのは、夏目氏の例のように、いつまでも、教え子の心の中に生きていることだ。教育者の楽しみは実にこゝにある。この点を大切に考えてほしい。

○子供の生活に響く教材を――。

○荒れた、慌しい生活を送っている中学生を救ってほしい。――

最近はガンの年令層も低くなり、中学生ですら心中する時代だ。こんな時代に、今日の授業での教材、自作の詩――卒業するあなたたちに――が、子供の胸に響くだろうか。なにか頭をなでているような気がしてならない。子供の現状は、知識の層と生活とは別のようであって、もっと生活にくい入るものがあってよいと思う。とにかく生活の基盤は言語にあるのであるから、生活と切り離してはいけない。生活に直截に響く教材を使わなくてはならぬ。そして、あれた慌しい生活を送っている中学生を救ってやってほしい。

○過去を大切に――

過去を大切にしたい。過去を大切にする子供を育てたい。過去によいことをやっておれば、生徒の心の支えとなっていて、保険のようなものだ。中学時代に、精神的に保険をかけてやってほしい。その意味で、十分子供の支えを培ってやってほしい。心の支えを与えてほしい。

芥川竜之介も新聞記者になってから、トロッコを書いた。トロッコを書いたのは、何かのきっかけで昔のことを思い出した。このきっかけが大切で、きっかけを作ってやる。何かのきっかけがあれば、過去を思い出し、その過去が、その時の支えになる。とにかく過去を大切にする。それが大事なことではなかろうか。

○詩の鑑賞について――

本日、浅野先生の扱われた“卒業するあなたたちに”の最後の三行（第一連の三行――ていねいに築いた知識の塔、病んでいる友をいたわる情愛のまなざし、見知らぬ土地を楽しく回った修学旅行のコース）は、先生の考えでよいと思う。詩というのは、傾きかけた感情をかき立てる、かき立ててやるところにある。感情をかき立て

るところに生きる喜びがある。昨夜岐阜に泊まって、朝岐阜より見えるはるか、かなたの山々の雪景色を見て、「いゝなあ」と思った。これは、自然から受ける恩恵ですが、詩を読むことによって、「いゝなあ、そうだなあ」と、感情が心の中にわいてくる。読者が感情をかき立てるならば、十分ではないか。

段落のことや、スタイルとかを第一義として、つゝきすぎるのは、かえってよくないのではないか。国語は子供の生活と密着していて、文法や語句の知識だけではない。

○指導の客観性について――

本日の授業には確かさがあった。生徒に考えさせ、思い当たらせる。確かさをきめて行く＝自己評価を常に行わせる授業であった。何のために、これをやるかが、はっきりしていた。進め方にも合理性があった。即ち指導に客観性があったといえる。それは、子供のオリジナルを尊重する態度でもある。

○文学作品の感想について――

文学作品の感想には、読み手（読者の側）からの感想と作者の側からの感想（作者になったつもり）の二つの場合が考えられる。この二つの立場に立たせると、たいへん活発になるものだ。

この場合感想にはピンからキリまであるが、各生徒の感想は、子供にとって尊いものであるから、是認してやらなくてはならない。低いものを見落としがちであるが、低いものを浮き上がらせ、高い方へ持っていくことが大切だと思う。低い面にも、かなりの層があるが、そういう生徒をひき立てることこそ大事ではなかろうか。

○教材とは――

教材は目標によって位置がかわる。めあてによってかわるものだ。これが他教科にないことで、例えば、アンデルセンの“マッチ売りの少女”これなど、幸福論までもってくれば、中学生にもよいし、死生観の面から見れば、高校生でも使える。

したがって、目標をはっきり立てて、それから教材を出すのが国語である。なぜなら、他教科のように知識形成ではなく、国語は言語活動（経験）そのものが内容であるから。

○文学教材は道徳教材にもなるということ――

山椒大夫を「兄弟仲良く」という面から見れば、道徳教育にも使える。しかし、道徳教育に使うとすれば、鑑賞が狭くなり、自分の反省（内省）のきっかけにするにすぎない。文学教育はもっと幅の広いもので、作品を味わう、即ち好きなところはどこか、うつくしいところはどこか、と感情をかき立てる、自意識をかき立てて、心情を豊かにするにある。

○私たちは若い世代を信頼し、大いに期待したい――。

デンマークに行ったとき、若い運転手が我が子に期待をかけていた――この話から私たちも若い世代を信頼し、期待をかけて、うんと可愛がってやってほしい。

だいたい以上のようなお話を聞きました。その他、感想を深め、思考力を伸ばしてやること、哲学する力を与えることなどいろいろ承ったが、紙数の都合で割愛します。

（文責　千種　俊）

――お断り――

石森先生が、梅林中学校を視察されたとき、梅林中学校教頭浅野和夫先生を始め、野田了爾先生、河村熙子先生のお三人が研究授業を実施されました。参会者一同は先生方のご立派な授業を拝見して、たいへん有意義な、いろいろなことを勉強させていただきました。

その日の研究授業やその後の話し合いの模様を詳しくお伝えするつもりでしたが、郵送料の都合で、割愛させていただきます。

当日授業をしていただいた先生方に厚くお礼を申し上げると共に、お許しをいただきたいと存じます。

（千種　記）

新入会員紹介

益田郡金山町　東中　大前敬子　野崎鉄郎　野田隆三

濃斐中　桂川好勝　森　敬子　今井証次郎

下呂町下呂中　田口　敬　二村益栄

上原中　二村恒晴　今井政美

竹原中　荒井信夫　曽我英子

萩原町南中　桂川鈴郎　三宅征子

北中　田口定一　細江正明　森元いほ子

馬瀬村中切中　中島健夫

吉城郡河合村元田中　藤守一心

宮川村坂下中　奥洞泰造　室屋昭彦　岡部勲

神岡町山田中　谷口健三　石坂昭義

神岡中　甲谷良治　栗山敏

古田昭教　西田郁雄

岐阜市　長森中　後藤一次

原稿募集

個人の悩みや現在問題としていることがら、研究論文会員だよりなどお気軽に投稿願います

送り先　岐阜市長森中　千種

会　計　報　告

1962.3.10　現在

収入	借入金	10,000
	会費 195 人分	19,500
	雑収入（ビニール袋 台）	12
	計	29,512

支出

10/10	国語主任会会場費	350
11/1	世話人打合会場費	150
11/15	世話人打合会場費	250
11/29	準備委員会費	450
11/17	設立発起人会印刷費	4,230
	（通信,用紙費）	
12/6	準備委員会案内状郵送料	230
1/8	総会準備案内状郵送料	3,155
	（印刷代）	
1/19	発会の栞　印刷代	7,200
1/22	故河田会長香奠	1,000
	宅葬、花輪代	700
1/19	不参加者栞発送代	1,630
	郵送料（副会長へ連絡）	30
	計	19,375
	残高	10,137

あとがき

たいへん忙しく、心せわしい昨今であります。

会員のみなさまおかわりありませんか。

岐阜県中学校国語教育研究会がうぶ声を上げて、すでに二か月たちました。その間、河田会長の急逝にあい、一時は、舵を失った舟に等しく、途方にくれましたが、なんとしても方向ぐらいは見失ってはと、必死の思いで発行したのが、機関誌というほどのものではない、この機関誌です。

まことに貧しいもので事務局としては、恐る〳〵導火線に火をつけた程度のものです。

おっかなびっくりで火をつけた導火線ですが、これがきっかけとなって、どこのつゝにも火が入れられ、立派な花火を打ち上げられるなら、これにこした幸いはありません。

県下には腕のよい花火師がたくさんみえます。どんな色のかわった花火でも結構です。どんどんお願いします。

みなさんの寄稿をお待ちしています。

（事務局　千種）

昭和 37 年 3 月 15 日
岐阜県中学校国語教育研究会事務局
（岐阜市立長森中学校内　電 2-3745）